



同志社同窓会にお問合せ下さい
1,000円

主の恵みは尽きることがない エスター・L・ヒバード先生追悼記念集

編集委員会編

エスター・ヒバード先生は長年同志社女子大の教育に尽力され、初代の学長も務められた大変有名な方である。本書は一九九九年に昇天されたヒバード先生を追悼する記念集であり、先生と交わる機会を得た多くの知人、友人、同僚、教え子たちから貴重な思い出を綴った文章が寄せられ、厳しくも温かい魅力溢れる先生のお人柄を伝えてくれる。女子大の枠を超えた所でも不思議な縁で結ばれた方々が多くおられ、先生との出会いを懐

かしく思い返しておられる。人生の途上で出会う人々に誠実に向き合い一人一人に深い思い出を残して逝かれた先生であつたことがわかるのである。業績として掲載された翻訳、随筆もヒバード先生のキリスト教研究や女子教育論の一端を示しており興味深い。グラビアに載せられた沢山の思い出の写真は昔の女子大の日常を垣間見せてくれる。

当時は当時で女子大も様々な苦悩を抱えていたのであり、徒に懐古趣味に浸ることは厳に慎まねばならない。だが昨今の慌しい状況下でこの本を読むときは、小規模ながらもある意味では今よりも遥かに落ち着いてアカデミックな雰囲気をもつていた昔の女子大の姿を思い、誰もが郷愁にかられるのではなからうか。本書は、熱心な教師の元で志の高い教育が行われてきた女子大の伝統を後世に伝える貴重な資料でもあると言える。

甲一元洋子（女子大学学芸学部教授）



ミネルヴァ書房
3,400円

欧米から見た岩倉使節団

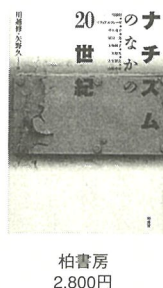
イアン・ニッシュ編

麻田貞雄（天学法学部教授、訳者代表）
望田幸男（天学名誉教授、伊藤彌彦、
西田毅、富沢克以上天学法学部教授、
諫早勇一（天学言語文化教育研究センター教授）ほか訳

岩倉使節団が近代日本の形成に果たした役割については、これまでさまざまな領域で研究が進められ、多くの研究蓄積が残されてきた。しかし、これらの研究の多くは、使節団の日本の近代史上における意義及び役割というところに主要なる関心が置かれてきた。つまり「近代日本の形成との関わり」という枠組みが暗に前提とされてきた。周知の通り、岩倉使節団の存在は日本のみならず、それを迎えた欧米各国にとっても少なからずの関心を引き起こした。岩倉

使節団の全容解明は、近代日本にとつての意義に加えて、使節団が辿った国々にとつて、その出現はいかなる「事件」として認識されたのかという客観的な「事実」の解明と合わせて見るときに、より立体的な実像として明示されよう。このたび、麻田貞雄他訳で出版されたイアン・ニッシュ編『欧米から見た岩倉使節団』は、アメリカ・イギリス・フランス・ベルギー・ドイツ・ロシア・スウェーデン・イタリアなど、岩倉使節団が辿った足跡を精緻な実証史料に基づいて丁寧に検証している。加えて、的確な訳語が用いられているところからも、本書が岩倉使節団に関する高い研究水準に裏打ちされた翻訳であることが見て取れる。今日的な表現を借りるならば、日本研究をグローバルな視野から（開く）という、新しい研究方法と方向を本書は示唆している。

沖田行司（大学文学部教授）



ナチズムのなかの20世紀

川越 修 大学経済学部教授 ほか編

二〇〇三年は、ナチス政権成立から七十年目になり、論壇・ジャーナリズムをにぎやかすことになろう。ナチス研究は、戦後の一時期とは様相を大きく変えた。特殊ドイツ的な異常現象というとなえ方を脱し、人間一般の、現代史一般の流れの中で考える方向に向かっている。本書もそうした方向での先端的研究である。そこでは現代国家一般を「社会国家」というタームでとらえ、その社会国家のなかの独自の社会・段階としてナチス国家・社会を位置付けようとしている。本書を読むならば、

こうした方向での研究努力の跡をよく理解できるし、さらにはナチス研究が、これまでの常識化した見方とは様変わりしている姿を知ることができるであろう。この点に、本書を推奨する理由がある。

問題点を挙げるとすれば、二十世紀論との関係である。二十世紀をナチズムという土俵だけで論じるのは、どう考えても無理がある。この点が、本書のタイトルと内容との間にぎこちないものが残る理由だろう。また本書のキイ・タームとして社会国家が採用されているが、これはドイツ人ないしドイツ現代史の研究者のなかでは通りがよいが、国際比較の場には通用し難いのではないだろうか。こうした問題点は感じるが、研究を前進させようと、その先端に立つて苦心している共同作業の跡は好感を抱かせる。

望田幸男(大学名誉教授)



ミネルヴァ書房
3,000円

二十世紀の政治思想家たち —新しい秩序像を求めて—

富沢克 大学法学部教授 ほか編著
濱真一郎 大学法学部専任講師、馬原潤二 大学大学院法学研究科 ほか著

二十世紀は政治思想の上で実に豊かな世紀だったのだろうか。十七世紀のイギリスの内乱がホッブズの主権理論を生み出し、十八世紀における文明の進展がルソーの政治哲学を生み出したように、「革命と戦争」によつて特徴づけられる二十世紀は大思想家を生み出したのか。本書の編者、富沢克氏の答えは否定的だが、それでも時代に真剣に向き合い、自らの思想を構築していった思想家の「姿勢」には見るべきものはあるという視点で本書は編まれている。

本書は、ゲオルク・ジンメル

やメルロー・ポンティイら個性豊かな九人のヨーロッパの思想家を取り上げ、その思想的核心を簡潔かつ明瞭に論じ、二十世紀が思想的にどのような時代であったのかを明らかにしている。ひとつには、二十世紀においてリベラリズムが退潮し、その対抗イデオロギーとしての社会主義の台頭が見られたが、社会主義には全体論的発想があるのでそれにどう対抗していくかが、政治思想の課題となったということである。もうひとつには、実在主義から構造主義へと移り変わる思想的潮流が思想家の政治認識にも影響を与え、共同主観的な政治認識の探究の跡が見られることである。つまり、「生活世界」から現実の政治社会を見据えていく点が、二十世紀の政治思想が切り拓いた地平である。本書は、政治思想の営みが二十世紀においても健在だったことを示す魅力的な書である。

寺島俊徳(関西大学教授)

岐路に立つ世界を語る

— 9・11以後の危機と希望

森 孝一 (大学神学部教授) ほか著
松原正毅ほか編平凡社
2,200円

本書は、九・一一テロ事件をきっかけに浮き彫りにされてきた現代世界の問題に迫ろうとしている。多彩な執筆者の論評は、それぞれの専門性を発揮しながらも、わかりやすくコンパクトにまとめられている。編者によれば、九・一一以降の時代状況を読み解く鍵は「文明の衝突」「宗教・民族対立」「地域紛争」にある。こうしたテーマのもと、本書は、イスラーム復興の歴史や現状、アメリカやヨーロッパを舞台とした葛藤の数々、そして、パレスチナやアフガニスタンをめぐる国際紛争の実情に迫

つている。

昨今、日本の国際貢献のあり方が論じられているが、編者は国際貢献の前提として「知のインフラ」を築かなければならないという。これは政治・経済だけでなく文化や宗教を含んだ学際的な取り組みにならざるを得ない。日本の論壇では、一神教を独善性の象徴と見なし、多神教的思考にこそ世界平和の鍵があるという安直な主張がいまだに繰り返されているが、こうした平板な文明理解を越えていく認識を本書は提供してくれる。

今、日本において、多元的な文明理解を構築していく作業が求められている。執筆者の小杉泰・臼杵陽・森孝一らは、今年度「イスラームとアメリカ」「文明の衝突」なのか? という科目を本学で開講しているが、そうした試みを手掛かりとしながら、さらなる展開が期待される。

小原克博 (大学神学部助教授)

生命の刑法学

上田健二 (大学法学部教授) 著

ミネルヴァ書房
6,800円

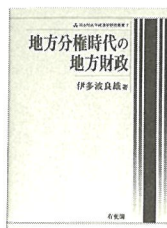
本書は、人の生命の刑法的保護に関する個別問題を扱ったものである。人の生命という最高かつ普遍的な法益が、国家が異なるがゆえにその取り扱いに大きな差異を生じていることは望ましくないのではないかと。筆者は以上の問題関心から、ドイツにおける中絶・安楽死・自死の刑法理論を検討した。その上で、比較法的な手法を用いて、わが国における刑法解釈論が、論証されるべきことを単に前提として主張するに過ぎないことを明らかにする。かくして筆者は、人の生命という、まさに普遍的な法益保護のあり方に関して、可能な限り国際的な合意を

獲得すべきだと説くのである。

ところで本書の主張は、ドイツの法哲学者アルトゥール・カウフマンの刑法思想、とりわけその「法的に自由な領域の理論」によって基本的に規定されている。これは、法秩序は、違法であるとも適法であるとも、法的にはそもそも評価されない領域というものを容認しなければならないという理論である。カウフマン自身はその理論を妊娠中絶事例に適用したが、筆者はそれ以外の生命に関する諸事例にまでその理論の適用範囲を広げた。その試みの妥当性は、カウフマンも認めるところであったという。

本書は、人の生命という普遍的な法益を保護するための法哲学的根拠に関心を抱く者にとって、大いに示唆的である。筆者によるカウフマンの翻訳(近刊予定の『法哲学 第二版』など)との併読をおすすめしたい。

濱 真一郎 (大学法学部専任講師)



有斐閣
4,400円

同志社大学経済学研究叢書7
地方分権時代の地方財政
伊多波良雄 著
(大学経済学部教授 著)

現在、日本の政府財政の悪化は、深刻化する不況によってますます制御困難の状況に陥りつつある。政府財政の中でも地方財政は、単に膨れつつある財政赤字という問題にとどまらず、「地方交付税交付金に依存した地方財政制度が、地方の活性化を妨げている」といった効率性の観点からも議論が出ており、本質的な見直しの必要性が問われていると言つて良い。このような時代背景の中で、本書は地方財政の改革の方向性を、厳密な理論的分析と実証分析を基礎に置きながら明快に指し示して

おり、高い価値を持っていると言える。

本書は、著者が二十年ほどの間にわたつて取り組んできた地方財政制度の厚生経済学的観点からの研究を体系化した博士論文を基にしており、効率的な資源配分の観点から地方財政制度のあり方を考える重要な視点を提起している。十二章のうち、はじめの五つの章では補助金、地方税など地方財政制度の位置付けを理論的に明確にしており、次の四つの章では補助金の実証的分析が行われ、最後の三つの章では望ましい地方税体系を描いている。これらの分析が、最適地方財政論的アプローチに沿ったものであり、先行研究を著者独自の視点で整理し、研究の焦点を先鋭化し、このアプローチでの研究水準を一步前進させているという点で、学問的にも高い評価を与えることができる書であると言えよう。

八木 匡(大学経済学部教授)



行路社
6,000円

同志社大学人文科学研究所叢書36
メキシコの女たちの声
メキシコ・フェミニズム運動資料集
松久玲子 著
(文学部文化教育研究センター教授 編)

本書は一九九八年に松久氏を中心に、日本、メキシコ双方の研究者たちによって始められた共同研究のひとつの成果である。サブタイトルの「運動資料集」という言葉が示す通り、ここには専門的な研究書や論説はもとより、文学作品、雑誌記事、会議記録など、実に多様なメディアからの九十三に上る翻訳資料が収録されている。

十九世紀末のフェミニズム運動の萌芽期から二十世紀初頭のメキシコ革命を経て、一九五三年の女性の参政権獲得までを扱った第一部では、四つの章の冒

頭に資料の翻訳担当者による詳しい解説論文が付されていて、この国の歴史とフェミニズム運動の関わりを理解するための大きな助けとなっている。七〇年代以降を扱った第二部の五つの章に集められた資料は、今日のメキシコ人女性が直面する問題を多面的に明らかにしている。

第三世界における女性の権利獲得に関する資料を系統的に収集した本書は、日本におけるフェミニズム研究と、メキシコを始めとするラテンアメリカ地域研究の双方にとつて貴重な情報源となることは間違いない。共同研究と資料翻訳の地道な作業を粘り強く続けてこられた松久氏らに心から敬意を表したい。また、今後各方面の研究発展に多に資するであろう研究成果が、本学人文科学研究所の研究叢書の一冊として刊行されたことを、同志社人の一人として誇りに思わずにはいられない。

立林良一(文学部文化教育研究センター助教授)

日本キリスト教婦人 矯風会京都支部百年史

『日本キリスト教婦人
矯風会京都支部百年史』
編集委員会編



大学広報課に
お問合せ下さい

本書はタイトルが示すとおり、日本キリスト教婦人矯風会京都支部の百年史である。矯風会は、廃娼運動や婦人参政権運動など、日本における女性解放の先駆的役割を担ってきたことで有名であるが、各地に支部があり、それぞれの地で女性の人権と生活向上のため重要な働きをしてきたことはあまり知られていない。それが本書により、京都という古い伝統に満ちた地における女性運動の一端が明らかにされた意義は大きい。

本編は主に、「京都支部百年

の歩み」、「現会員の思い」、「矯風会京都支部年表」、及び「資料」からなっている。特に支部百年の歩みを讀むと、明治から第二次世界大戦までの、女性が厳しく差別された状況下で、個々の会員がキリスト者として信念を持つて運動を展開していた様子が如実に示されており、その勇氣と努力に頭の下がる思いがする。

更に京都支部は、その成立の初期から、同志社が大きくかわつており、特に同志社女学校と矯風会との関係を知る上でも、貴重な資料であると言える。女性の人権が認められる社会になつても、まだ差別的残る中で、矯風会活動を今も肅々と進めておられる姿はさすがしい。九〇頁あまりの小編であるが、十分な資料が残っていない中を、よくここまでまとめられたと思う。編集者一同のご努力に敬意を表したい。

枝澤康代（女子大学文学部教授）



ブレーン出版
2,600円

異文化との出会い！ 子どもの発達と心理

井上智義 天文学部教授、編著、稲田雅美 女子大学文学部助教授、崔昌基、森川理美 以て大学大学院文学研究科 ほか著

二十一世紀、交通機関や情報通信の急速な発達によって、異文化との出会いの機会が激増している。そんな異文化と出会う子どもたちの困惑、葛藤、成長の姿を生き生きと描いた本書には、類書にない二つの特色がある。第一の特色は日本人の子どもたちから見た異文化（外国語学習、カナダ文化など）だけではなく、視点を外国に移し、韓国、トンガ、南米の子どもたちにとつての異文化（日本語教育や日本文化など）との出会いについて取り上げていることである。

第二の特色はどうしても注目

されてしまう異言語の問題だけを異文化の問題として狭くとらえずに、言語の問題はもとより、視覚シンボル、音楽文化、数の表現、漫画などといった言語以外の視点からも異文化を考えていることにある。

すぐにわかるように、これら相対的な視点と複数の視点を重視する本書の特色こそ、異文化理解の本質なのである。したがって、本書の興味深い内容にひかれて読みすすめるだけで、異文化理解のエッセンスが暗黙のうちに身につくはずである。また、自分にとって異質である異文化を理解することは、自国の言語、文学、歴史、人間などを深く知ることにもつながる。これらの点から、本書は異文化に興味のある読者だけではなく、言語、文学、歴史、人間に少しでも関心のある読者なら誰にとつても、必ず得るところのある書物と断言できよう。

高橋雅延 聖心女子大学助教授



世界思想社
1,300円

社会人大学院生入門 社会人だからこそ楽しめる 影山貴彦 女子大学文学部助教 著

隠し味に「人にとって楽しみとは何か」という意識がある。

メデイアエンターテインメント論を専攻する筆者は「エンターテインメントとは知的遊び心を満足させる行為、産物」と定義づけている。社会人の大学院進学は、転職のための環境づくりや、自らのスキルアップなど、様々な背景がある。しかし、「知的興味を満足させる行為」だという点は共通している。「遊び心」と「興味」。人にとって不可欠で、近い関係にある意識ではないだろうか。

読み進むにつれ「大学院に行

くことは、お笑いや芝居を見るのと同じだ」と筆者が考えていることに気づく。仕事と大学院の両立には苦勞も伴う。だから、「大学院生活で知的興味を満足させることは、エンターテインメントを楽しむことと同じと考えてほしい」という助言なのだろう。終始、筆者の体験を案内役に綴られている。その方法論は参考にも、反面教師にもできると感じた。

資料編にある著者の修士論文が気に入った。「文学とエンターテインメント」を課題にし、「優れたエンターテインメントは、アカデミズムの研究に十二分に堪え得るものであり、文学においても例外でない」と論じている。「社会の成熟にエンターテインメントは不可欠だし、それを理解できない感性は恥ずかしい」と飛躍的に読み解き、一人喜んでいた。

竹久岐史 新聞記者



御茶の水書房
2,200円

アーモストからの手紙

榎原胖夫(大学名誉教授 著)

アーモスト大学のチャールズ・コール学長はじめて同志社大学を公式訪問したのは一九五三年二月のことだった。アーモストに帰った学長は、敗戦でうちひしがれた日本にアーモスト大学が貢献できる方法の一つとして、アーモストの誇る日本人卒業生、新島襄と内村鑑三を記念して、奨学金を創設した。そして、最初の新島スカラーとして選ばれ、一九五四年にアーモスト大学に留学したのが、当時経済学部助手だった榎原胖夫氏である。

彼はアーモストから同志社大学に派遣されていたオーテス・

ケリー教授の主宰するセミナー(アメリカの神学者ニーパーの本を翻訳したので「ニーパー・グループ」と呼ばれていた)の仲間あてに、留学先から毎週手紙を書いてよこした。仲間の連中は、筆者を含めて、彼の手紙に惹きつけられ、あたかも自分自身がアーモストに留学して、その苦勞と喜びにあずかっているような、一種の擬似体験をしたのであった。

自分は心臓が弱く、引つ込み思案で、社交的でないと告白する榎原氏だが、最後には留学延長をめぐってコール学長と堂々と渡り合ったり、アメリカの女の子がなぜ美しく見えるのかを哲学的に分析してみせる手腕に感銘を受ける。ここに描写された異文化体験はいまなお価値を失わない原体験であり、五〇年代アメリカの知的、社会的、政治経済的雰囲気を感じさせる力を豊かに備えている。

北垣宗治 敬和学園大学長



世界思想社
2,200円

キリスト教文学を 学ぶ人のために

安森敏隆、吉海直人（以上女子大学文学部教授）、杉野徹（女子大学現代社会学部教授）編

キリスト教は二千年にわたって、出逢った地の人々の魂を育て、豊かな伝説と物語を生み、各地各民族の精神文化に深い影響を与えてきた。そしてそこから多くのキリスト教文学が産出されたが、これらの多くは日本語に翻訳されて今も私たちの心を潤し、人生を多角的に見る手がかりとも、あるいは生きる力の源ともなっている。本書はこの大きな文学領域に踏み入って、その歴史、特色、解釈方法などの諸問題を現代の視点から鋭く追及する論文九編と、福音書からイエスの実像をさぐり出

そうとする対談、さらに五十六の名著（うち三十四は日本人による作品）についての紹介と解説、を並べたものである。企画としては相当に贅沢であり、その文学世界の奥の深さから考えると、親切な構成になっている。執筆者は四十三人にのぼるが、そのうち十八人は同志社大学、同志社女子大学で現在教壇に立つておられ、またこのほかに同志社のキャンパスでかつて教育に携わった方々は五指にあまる。従って本書は同志社のキリスト教主義の地盤から生み出された喜ばしい貢献の一つと言える。キリスト教文学といえば、信仰を持つ作家の作品を考えがちであるが、本書では聖書が日本でどう受容されたかの問題を意識し、さらにキリスト教に批判的であった著述家の作品も視野に入れてある。本書の幅の広さと言えよう。三人の編集者と執筆者に感謝したい。

橋本滋男（大学神学部教授）



The Iris Press
各20,000円
（別冊除く）

THE WORKS OF LINDEY WILLIAMS HUBBEL

林 秋石著作集
POEMS, ESSAYS, 別冊
Lindley Williams Hubbell 著
尾崎 寔（女子大学文学部教授）編

全巻英語である。

著者ハツベル先生（一九〇一—一九九四）は、一九五三年にアメリカから来日され、以後、同志社大学文学部英文学科の教授として、主としてシェイクスピア、英詩の講義を担当され、一九七〇年まで、熱心に学生の指導に当たっていた。一九六〇年に帰化され、林秋石を名づけられた。

本著作集は、論文集、詩集の二巻に分れ、前者は「シェイクスピア講義」（一九五八）、「シ

エイクスピアと古典劇」（一九六二）、「英詩の研究」（一九八二）の三つの再刊であり、後者には一九二七年から一九八二年にかけて発表された詩集十五が再録されている。二巻合わせて一四〇〇頁に近い大冊である。

卓越した詩人、またシェイクスピア学者、としての先生の真価が未だ広く、正しく認識されているとはいえない今、先生の代表作がこんな形で再刊されたことはうれしいことである。先生は本書には未収録の論文、翻訳、詩など多く書かれているが、その内、本書刊行直後にその存在が発見された『旅行記 一九五三—一九五四』が続いて刊行されたことを付記しておく。以上いずれもの発行所は「The Iris Press」（かきつばた会、二六〇三—一八〇四七 京都市北区上賀茂本山一八五—五、電話〇七五（七〇二）八五五〇）である。

木村俊夫（大学名誉教授）

地域学のすすめ

森 浩一（大学名誉教授） 著



岩波書店
700円

かつて「世界村」と呼ばれた土地が対馬にあった。室町時代、日之本將軍と名のつた人物が津軽にいた。三尾勢（三河・尾張・伊勢）の海を囲む東海には、持統天皇の行幸に代表される吸引力があり、中世陶器生産のメッカとしての拡散性があつた。「草深い田舎」という印象が先行する中世以前の関東であるが、相模国に関係するとみられる漆部伊波（ぬりべのいは）は、東大寺の大仏建立に際して、どこよりも多い二万段の布を献上したという。著しい富の生産と蓄積である。畿内を中心に語られる歴

史が多いなか、実は日本列島のいたるところには、個性的で豊かな文化に溢れた地域とその歴史があつたのである。

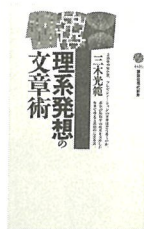
森浩一氏は、「考古学は地域に勇気をあたえる」と、考古学の資料をおして地域の重要性を提唱されてきているが、本書を読み進めると、日本列島の歴史の中で、それぞれの地域が重要な役割を果たしてきたこと、そして日本列島の本当の歴史とは、このような大小さまざまな地域のもつ歴史性（エネルギー）を総合させた研究から生まれることが、臨場感をもつてせまってくる。

周囲に流されることなく、地にしっかりと足をつけて社会と対峙することの大切さ。考古学は地域に勇気を与えると同時に、閉塞感の漂う現代社会に、次代を切り拓くための勇気と元気を与えてくれる学問でもあることを、本書はあらためて実感させてくれる。

鋤柄俊夫（大学歴史資料館専任講師）

理系発想の文章術

三木光範（工学学部教授） 著



講談社
680円

最近の大学生は、レポート課題が出るとまずインターネットで検索するという。そこで、私も今回の書評を書くにあたって、インターネットで検索してみた。Googleという検索エンジンで本のタイトルを入力すると七十件ほどのヒットがあつた。出版半年でこれだけのヒット数があるというのはなかなか評判の本ではないだろうか。検索されたページには、いくつかの書評が出ていた。これならコピー・ペーストすれば原稿完成である。なるほど、学生たちがなぜ真つ先にインターネットで検索するか理解できた。

さて、この本の表題でもある

「理系発想の文章術」とは、「フオーマットを重んじ、ワンパターンを理想とし、表現よりも論理的構成を重視することで文章がうまくなるという方法」であり、文章術のもう一方の極である文学的表現と対峙する考えであるが、理系の立場からは著者の考えに私も同感である。とくに、「文章は一次元メディアであり、脳にとつては外部メモリとして機能する」とする著者の主張は自身の経験と照らし合わせても納得できる。さらに、著者がこの外部メモリである文章を「論理的思考を進めるためのワーキングメモリ」として意識的に使うと、「頭の中にある思考のネットワークを一次元の糸」である「良い文章」として導出できるとする文章完成のアプローチ手法は独創的であり、脳と外部媒体との共同作業という観点からも興味深い。ユニークな本である。一読を勧める次第である。

渡辺好章（工学学部教授）

『同志社山脈』が出版されました

昨年の創立記念日に同志社大学は同志社創立百二十七年を記念して、『同志社山脈』（晃洋書房）という書物を刊行いたしました。これは、一九九〇年五月から二〇〇一年三月まで八十四回にわたって学内誌の『同志社大学広報』に連載された「人物点描」というシリーズ（第一号はもちろん新島襄です）を集大成したものです。

その際、このシリーズで取り上げられた既発表の八十一人のほかに、あらたに三十二人を追加して書き下ろし、総数百十三人の「列伝」としましたので、同書の副題を「113人のプロフィール」といたしました。読み物として楽しめるだけでなく、ミニ人物事典としても活用できるよう参考文献や索引にも力を入れました。

た。執筆者は物故者ひとりを含めて二十四人です。本書で取り上げた百十三人は広く同志社関係者とし、主として十九世紀から二十世紀前半までに活躍した物故者に限定いたしました。したがって、掲載誌が同志社大学（前身は男子校）の学内誌であったという制約もあって、登場人物が男性に偏ったのは、やむをえないことでした。

当初は百人という切りのよい数に収める計画でしたが、編集委員会の人選を協議したところ、とうてい収まり切らず、やや中途半端な数字ではありますが、最終的には百十三人になりました。

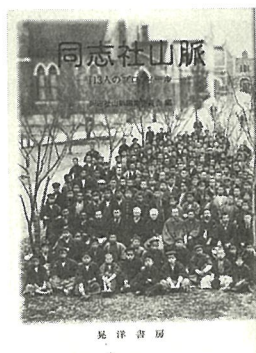
ひとつには活動分野のバランスをとりたい、という編集方針に基づいたからです。百十三人を十五分野（同志社総

長・教員、医療、福祉、学界、政財界、芸術、体育・スポーツ、ジャーナリストなどに分けました。これらの人々の活動を仔細に見れば、同志社関係者が諸々の領域で「世の光」、「地の塩」として多彩な足跡を残していることがお分かりいただけます。

ところで、連載時には将来的な出版計画の明確な見通しなどなかったために、ただアトランダムに重要と思われる人物をその都度、脈絡無く取り上げて来たという経緯があります。そのため分野的に偏りが見られました。それを今回、多少とも是正する努力をいたしました。また、なるべく「新人」を発掘することを心がけました。その結果、

思わぬ人物が収録されていますので、読者は意外な人物に遭遇されるはずです。「同志社山脈」の裾野が予想以上に広いということがお分かりいただけると思います。その反面、この種の出版物には「常連」ともいふべき著名人が抜け落ちる、という欠陥が生じております。これについては、他日、本書の続編が実現できた際には是正できれば、と考えております。

（同志社社史資料室）



『同志社山脈—113人のプロフィール—』
学校法人同志社、同志社山脈編集委員会編
晃洋書房 1,100円 256ページ
一般書店および同志社大学事業課
(TEL 075-251-3049)で販売中